

夜の小品

第二次大戦後（1963年）に、ブリテンが作曲した唯一のピアノ独奏曲。演奏時間が約6分と短いのは、リーズ国際ピアノ・コンクールの課題曲として委嘱されたため。ゆっくりとしたテンポに貫かれ、精妙なコントロールによってピアノという楽器のソノリティを最大限に引き出すことに主眼が置かれている。

《金曜日の午後》より 第1曲「うっとうしい悩みよ、去れ」、第3曲「カッコウ!」、第12曲「オールド・アブラム・ブラウン」

ブリテンが、プレタティン市のクライヴ・ハウス・スクールで学校長を務めていた兄ロバート・ブリテンのために、1933年から35年にかけて書いた子どものための合唱曲集。12曲のなかでも、カッコウの鳴き真似をバックに純朴なメロディを歌う第3曲「カッコウ!」が白眉。また、第12曲「オールド・アブラム・ブラウン」は典礼曲（聖歌）で、のちに《キャロルの祭典》の第6曲「この赤子が」にも使用された。

聖チェチーリア讃歌

ブリテンは1938年に渡米し、約2年半を北米大陸で過ごした。そして本曲は、1942年に帰国する際、船上で作曲された。聖チェチーリアは、布教の折りにハーブを手に弾き語りしながら神を賛美したという伝説の聖人で、音楽と盲人の守護聖人。

混声5部からなる無伴奏合唱曲は、ブリテンが敬愛したW.H.オーデンの詩による。本曲は、その静謐さゆえにパーセル以来の英国の宗教音楽の香りを受け継ぐ一方、オペラふうの闊達な音の動きが与えられているところも特徴と言える。

ハーブのための組曲

ブリテンが残したハーブ・ソロのための作品は、《キャロルの祭典》の「間奏曲」と、ハーピストのオシアン・エリスのために書いた本作のみ。序曲、トッカータ、ノクチュルヌ、フーガ、讃歌という5曲からなり、初演は1969年のオールドバラ音楽祭。ハーブの広い音域が隅々まで生かされ、トレモロの効果的な活用が耳に残る、素晴らしい作品に仕上がっている。変奏曲である第5曲は、ウェールズの讃美歌「聖デニオ（神の知恵ぞ、はかりなき）」を主題に用い、崇高な祈りの歌で曲を締めくくる。

キャロルの祭典

1942年、北米からの帰国の船上で、ブリテンは少年合唱のための7曲のクリ

スマス・キャロルを作曲。それをもとに追加・改訂を施したのが全 11 曲からなる本作である（中間に 1 曲の器楽曲をはさむ）。初演は 1943 年 12 月 4 日、ロンドンのウィグモアホール。少年合唱にハープを加えた編成が斬新で、五音階を使ったハープの書法は、アメリカで耳にしたガムラン合奏がヒントになっているという。現在では、ハープ独奏の「間奏曲」がロシア正教の教会の鐘の音を模している点に注目する研究者も多い。同時代のラフマニノフやストラヴィンスキーが、積極的に鐘の響きを音楽語法に取り入れていたからだ。この《キャロルの祭典》もロシア聖歌と同様に、教会堂のなかで交錯し増幅される声の響きを熱心に探究している。カトリック教徒だったブリテンは、16 世紀のクリスマス・イヴの挽歌集「Hodie（古英語で today の意）」の祈禱文を主に、荘厳な雰囲気醸し出している。第 2 曲「主の降誕を歓迎！」と第 10 曲「神に感謝」が、のちに歌劇《ピーター・グライムズ》に転用され、オペラ・ファンには馴染みの旋律となっている。